

『白山史学』の「彙報」欄

鈴木 信昭

私が東洋大学文学部史学科東洋史専攻に入学したのは、一九七五年の四月でしたが、卒業するまでの四年間に『白山史学』が刊行されたのは、一九七七年の十九号、僅か一点だけでした。次の二十号が刊行されたのが一九八二年。こうした不定期刊となった状況については、どなたかがお書きになると思われますので、私は、一九八五年の二十一号以降、年一回の定期刊となった頃の『白山史学』、それも私が史学科助手となった一九八八年の二十四号以降の『白山史学』について書いてみたいと思います。

私が史学科助手となったのは、一九八八年四月。赴任して間もなく刊行されたのが二十四号の『白山史学』でした。それまでの『白山史学』の内容は、特に二十号までは、論文・研究ノート・書評以外に、彙報欄があり、そこで「卒業生の卒論題目」と「史学科講義題目」という項目を設けて、卒業生の名前と卒論の題目、開講講義科目と担当の先生の名前を明記するというものでした。

ところが二十一号からは、彙報欄に「学会行事」と「研究室の動き」という項目が追加されるようになります。こうした措置は、おそらく一九八五年から白山史学会への学部生の全員加入制が決まったために、会員である全学生に対して、白山史学会並びに史学科研究室の動向を詳しく知らせなければならない、いわば情報公開的な意味合いから行われたのではないかと思われます。

こうした彙報の形態は、二十三号まで続きますが、二十四号からは新たに「研究会紹介」と「大学院研修旅行参加記」が加わります。二つの項目とも、『白山史学』をより学生の参加した学会誌にしたいという思いから執行部で検討された

ものでした。当時、史学科には、学生による研究会（例えば東洋史研究会というような名前）が六つほどありました。で、それら研究会の活動状況を報告してもらうことで、学部生の会誌に対する関心も引き出そうと考えたわけです。しかし、「研究会紹介」という企画は、次号でも同じような内容で書いてもらうわけにはいきませんでした。二十五号では「研究会夏合宿報告」と題して、それぞれの研究会の夏合宿の意義やその状況を書いてもらいました。ただし、学生会員の声を誌面に反映させようという意図は、二十四・二十五号で終わりました。やはり研究会の活動だけで学生の声を誌面に反映させるには無理があったのでしょう。一方の「大学院研修旅行参加記」は、研修旅行が年一回と定例化したこともあり、現在でも継続されています。

ところで、研究会を通しての学生の誌面参加は挫折してしまいましたが、それに代わって卒業生会員の声も誌面に参加させなければならぬのではないか、或いは誌面を通じて会員の交流も深めなければならないのではないかとこの意図から、二十六号から彙報欄の他に「通信」欄を設けて、会員の方々に近況報告をしてもらう新企画（会員の声）を始めました。卒業後も会員となっている方々が多いのに、これまでの『白山史学』では、そうした卒業生会員からの「声」をほとんど掲載していなかったためでした。毎号二人の卒業生に原稿を依頼して掲載しましたが、「会員の声」は現在（三十九号）でも続いています。ただし、当初の意図とは裏腹に、現在ではこの「会員の声」の内容は異なっていました。その契機は三十号から始まっているようです。史学科では一九九一年度から、学部生を対象にした研修旅行が行われるようになっていたのですが、『白山史学』三十号の「会員の声」には、卒業生が二人、学部生が一人原稿を寄せており、その学部生が研修旅行について初めての文章を書きました。おそらくは、この原稿が当時の編集部目に留まったのだでしょう。翌一九九五年の三十一号から、「会員の声」欄には卒業生の文章が無くなり、学部生が「見学会に参加して」という題目で文章を掲載しており、それが翌号から定式化してしまいました（題目も同じ）。確かに、卒業生を捜して原稿を依頼するのは大変な作業で、それに較べて研修旅行に参加した学部生から原稿を集めるという方法は、会誌を編集する人に

とつては楽なことですが、いつの間にか、「会員の声」から卒業生が消えてしまったのは悲しいことです。

ところで、最新の三十九号の「彙報・通信」欄は、次のような内容となっています。「学会行事」、「研究室の動き」、そして新項目「バス・研修旅行記」として学部生九名の文章、「大学院研修旅行記」(二名)、「会員の声」として二名の学生の文章です。ただし「会員の声」とはなっていない、学部生の旅行記が新たな項目「バス・研修旅行記」に集約されてしまったため、そこに学部生の文章はなく、院生の文章だけとなっています。そしてその内容も、その前の「大学院研修旅行記」と同じ、大学院の研修旅行についてのものとなっています。三十九号で新項目が増えたことは興味深いものがあります。『白山史学』の編集に一時携わった者として、毎号彙報欄を見るのも、楽しみの一つです。今後の発展を願っております。

(昭和五十四年卒 東洋史専攻)